

※クリックすると記事のページを開きます。

① 大学院短期派遣 JEP 報告①（2018 年 8 - 9 月）	2
② 大学院短期派遣 JEP 報告②（2018 年 9 月）	5
③ 大学院長期派遣留学報告（2018 年 9 月-2019 年 7 月）	9

① 大学院短期派遣 JEP 報告① (2018 年 8 - 9 月)

総合国際学研究科世界言語社会専攻

河戸 幸恵

1. 短期派遣概要

2018 年 8 月 21 日(火)から約 3 週間ラオス人民民主共和国の首都、ビエンチャンに滞在し、ラオス国立大学で個人指導を受けた他、修士論文執筆のためのデータ・資料の収集等を行いました。

2. 個人指導

ラオス国立大学では、同大学文学部のカムプイ・ボンルーサー先生から個人指導を賜り、修士論文執筆に向けた学習を行いました。日時・内容は指導してくださった先生とご相談の上決定し、基本的には平日の午前中に指導を受けていました。

私はラオスの祠祭祀を主たる研究対象として修士論文を執筆しており、祠がどういった存在であるのか、祭祀がいかようにして実践されているかに関心を持っていました。この祠は、ラオスをはじめとした東南アジア大陸部でしばしば見られるもので、当地では土地の主を祀るものとして認識されています。いくつかの呼称がありますが、ラオスでは一般にチャオティ、またはホーパプムと呼ばれていました。

座学での指導は 8 月 28 日(火)から 9 月 6 日(木)の間、同大学文学部で受講し、前半はラオスの宗教・信仰について文献（先生の執筆された論文、『Bandaa saasanaa thii khong tua yuu soopoopoo laaw』(ラオス人民民主共和国の全宗教) など)に即して学びました。

後半は論文の構成指導、現地調査の質問項目と調査許可申請の作成等についてご指導いただき、調査ならびに執筆の準備を行いました。この調査は、祠の設置に関する聞き取り（祠の設置理由・設置時期・形態の選択理由・日常祭祀の方法等）と祠販売店



図 1：ラオス国立大学内
売店前の祠

での聞き取り（販売・設置に関する認識等）を主軸とし、ビエンチャンで祠祭祀がどのように行われているかのデータを

ることを目的としていました。

質問項目の作成に当たっては、祠祭祀の分析に必要だと思われる質問項目についてご指摘いただいた他、インフォーマントの方に伝わりやすい表現をご指導いただきました。また、調査にあたりインフォーマントの方に調査目的と収集した情報の利用範囲についてご説明する文言についてもご指導いただきました。

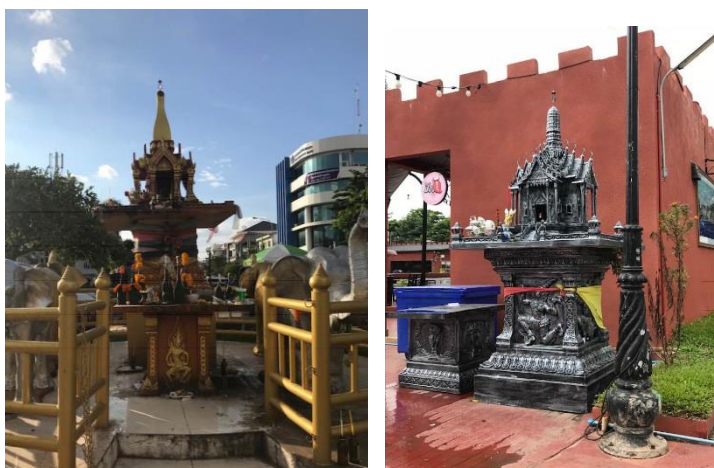
3. 資料・文献収集

資料・文献は、①文学部図書室②大学内売店（通称ブックショップ、日本の大学の生協/購買のような品揃え）③国営書店の3カ所で入手しました。

① 文学部図書室：ラオス国立大学の先生方が執筆した書籍・論文、ラオス文学・語学系の研究所、文学部で使用する教科書、卒業生の卒業論文・修士論文等が所蔵されている。論文集、教科書等は在庫があれば購入も可能。

② 大学内売店：語学系の教材や辞書、各科目のテキスト、ラオスの小中高で使用されている教科書の他、小説や外国語書籍も取り揃えている。今回の個人指導で使用したテキストもここで購入。

③ 国営書店：市内中心部にある書店。統計資料等、政府刊行物が入手可能。また、子ども向けの絵本や地図も販売。



（左：タラート・サオ駐車場の祠、右：ナンブ広場の祠・国営書店はここから徒歩5分ほど）

また、今回の渡航時には利用しませんでした。前

回の渡航時にはラオス国立大学附属図書館及びラオス国立図書館でも地域研究・宗教学系の文献収集が可能です。

4. 短期派遣の成果

ラオスの精霊信仰をご専門とする先生から直接ご指導を受けられたことで、貴重な学びが得られました。ラオスでの宗教・信仰に関する文献の購読を通し、海外の研究者による宗教研究では描写されてこなかった部分や、分析手法を知り、

また調査で収集すべき情報が何かが明確化しました。

また、文献中に持ちいられていた祠の写真の撮影地に実際の調査で訪れた際、文献が書かれた時点から建て替えられたことが明らかになり、そのことが私の修士論文での議論の発端となりました。

加えて、文献購読時に宗教・信仰にまつわる用語や表現について不明点を質問する機会が得られたことで、聞き取り調査時の回答の円滑な理解にもつながりました。

今回の短期派遣では、3 週間という短い期間であったにもかかわらず、非常に多くの学びを得ることができました。このような機会をいただいたことを心から感謝いたします。今回の学びを今後に活かしていけるよう精一杯努めてまいりたいと存じます。

② 大学院短期派遣 JEP 報告② (2018 年 9 月)

東京外国語大学大学院総合国際学研究科

博士前期課程

片井萌子

2018 年 9 月 18 日から 27 日までの 10 日間におけるラオス国立大学でのジョイントエデュケーションプログラムについて報告いたします。本プログラムに参加した目的は、自身の研究に必要な情報を収集するとともに、ラオス国立大学でラオス語学を専門とする先生方から今後の研究に関するご指導・ご助言をいただき、ラオス語学の知見を深めることでした。

上記の期間中、現地では主に以下の 3 つの活動を行いました。

- 1) ラオス国立大学文学部ラオス語学文化学科長による研究指導
- 2) ラオス語の個別授業
- 3) ラオス語に関する文献の調査・収集

以下にそれぞれについてご報告いたします。



写真 1) ラオス国立大学文学部棟

1) ラオス国立大学文学部ラオス語学文化学科長による指導・助言

現在、私はラオス語学の特に「ラオス語の受身表現」というテーマについて研究を進めています。今回のプログラムでは、ラオス語学をご専門とする学科長にお会いし、私の研究に関するご指導・ご助言をいただくことができました。学科長との面談では、私からは研究の内容や進捗状況などについて説明し、学科長からは今後、研究を進めていく上での助言などをいただきました。特に、参考にするといふ文法書や、論文にまとめる際の注意点について詳しく教えていただきました。他にも、研究のために必要になる資料の所在地や、目を通すべき文献などについても教えていただきました。お忙しいこともあり、長時間お話をすることはできませんでしたが、何度も面談をしていただき、研究を進めるために重要かつ貴重な情報を得ることができました。

2) ラオス語の個別授業

プログラム期間中、1日2時間程度、ラオス国立大学の先生にラオス語の個人指導をしていただきました。授業では、ラオスにおける国語学やラオス語文法書を中心に精読し、私の研究対象について指導していただきました。日本での入手が困難な文法書を使うことで、自分の研究対象を別の視点からみることができました。そこにはラオス特有のラオス語学における考え方や捉え方があり、大変勉強になりました。



写真2) 学生の学習スペース

また、研究を進めていく中で生まれていた疑問点を解消していく機会にもなりました。インフォーマント調査のような形で、「この表現は可能なのか」、「この文型とこの文型の違いは何なのか」、などの、研究に直接結びつくような質問を多くすることができました。ラオスでの授業で改めて、自分の研究の方向性や問題点なども考えることができたと感じています。

3) ラオス語に関する文献の調査・収集

プログラムに参加したもう一つの大きな目的はラオス語に関する文献を収集することでした。自分の研究の参考にするための先行研究はもちろん、用例収集のための資料などを探すために、いくつかの施設を訪れました。

1. ラオス国立図書館

ラオス国立図書館は数年前にビエンチャンの市街地から国立博物館の近くに移設されました。そのため、外観も内装も新しく、とてもきれいになっていました。建物は4階建てで、カテゴリーごとに本が分類されていました。ラオス語関連の文献はあまり見つかりませんでしたが、周辺のASEAN諸国に関する本や、コンピューター関係の本が多く置かれていました。



写真3) 国立図書館の中

2. ラオス国立大学中央図書館

ラオス国立大学の敷地内にある大学の図書館も見学させていただきました。ここは3階建てになっており、1階にはセキュリティゲートや事務室があり、2階3階に本や雑誌が置かれていました。学生は入館の際カードをスキャンしてセキュリティゲートを通る必要があり、しっかり管理されていた印象です。蔵書数はあまり多くありませんでしたが、こちらも国立図書館と同様にカテゴリーごとに分類されていて、利用しやすい施設でした。



写真4) 学生が執筆した論文

3. 文学部ラオス語学文化学科図書室

ラオス語文学科の図書室が今回のプログラムで私が最も頻繁に訪れていた場所です。この図書室には学生の執筆した卒論や修論、ラオス語の文法書、ラオス関連の文献がたくさん置かれていました。ここでは学生のための教科書販売も行っていたのが印象的でした。ラオス語文学科図書室には先生が2名駐在しており、どういう資料を探しているのかを伝えると、どこに置いてあるかを教えてくれて、とても利用しやすかったです。

ラオス語に関する文献はこの図書室が最も豊富でした。特に学生の執筆した卒論や修論が多く置かれていて、それらに目を通すことで、同じ立場のラオスの学生がどのような、また、どのように研究をしているのかを知ることができました。研究に利用できる文献をたくさん閲覧することができ、大変参考になりました。

上記の3か所以外にも、街中の国営書店や私営書店を見て回り、研究に利用するための資料や文献を収集することができました。日本では閲覧できない文献を手にするができるのは、現地で研究をする大きな意義の一つであると強く

感じました。

以上が、今回のジョイントエデュケーションプログラムにおいて、私が行った主な活動です。短い期間ではありましたが、ラオスで自身の研究を新たな視点や考え方で見ることができ、大変有意義な時間を過ごすことができました。今回のプロジェクトで得たことを、しっかりと研究に活かしていきたいと思っています。

以上

③ 大学院長期派遣留学報告（2018 年 9 月-2019 年 7 月）

ラオス留学体験記

総合国際学研究科 世界言語社会専攻

国際社会コース 博士前期課程

近藤 茜

2018 年 9 月から 2019 年の 7 月までの約 10 ヶ月、ラオス人民民主共和国の首都ビエンチャンに留学しました。平日はラオス国立大学文学部ラオス語・ラオス文化学科で授業を受け、授業のない日は現在大学院で行っている研究テーマに沿って情報収集を行いました。休日になると美味しいラオス料理を友達と食べに行ったり、国内旅行をしたりというように平日も休日も充実した毎日を送ることができました。以下、私がどのようにラオスで過ごしていたのかを詳しく記したいと思います。

授業はラオス語・ラオス文化学科で開講されているものの中から学年を問わずに自分の勉強したい科目を自由に選択することができました。私は文学や文化について学ぶことができる授業を選択しました。その中でも特に面白かった授業は、ラオスの昔からあることわざや格言を学ぶものです。日常会話では使わないような語句が多く、分かりにくい比喻ばかりでなかなか理解することが難しかったのですが、先生が具体例を多く出してくれたり、クラスの友達が簡単な言葉で説明してくれたりして私の理解を助けてくれました。先生や友達の気遣いがとても嬉しかったです。テストでは、授業で出てきた格言を口頭で説明するというもので範囲も広く覚えるのが大変でしたが、テスト前にクラスの友達と問題を出し合い、さらに私の理解が間違っていたところを訂正してくれたおかげで何とか合格することができました。

時々、日本語学科の先生に声をかけていただいて授業に参加しました。会話の授業でインタビューを受けたり、買い物のロールプレイングゲームに参加したりしました。さらに、12 月に行われた文学部のフードフェスティバルでは、日本語学科のブースのお手伝いとして、一緒におにぎりを握り、コロッケを揚げて、お店の前でお客さんを呼び込みました。日本語とラオス語で日本の文化や生活を紹介することで、あらためて自分の国について考えるきっかけにもなりました。

授業の終わった午後や、授業のない平日は自分の研究テーマに沿った情報収集に時間を使いました。私はラオス政府が行っている、全国の村に「文化村」という称号を与える政策に興味をもち、その政策がどのような背景で立案されたのか、どのような村が選ばれるのかということをはっきりとしたいと思っています。そのために、大学の図書館や街中にある国営の本屋で文献を探しました。それだけではなく、首都ビエンチャンの中にある村の役場を実際に訪ねて、インタビューを行いました。

村役場は私の暮らすアパートから徒歩や自転車で探し、見つけたら飛び込んでインタビューを行いました。どの村でも突然やってきた日本人の話を聞いて、質問に答えてくれました。なかなか伝わらないときはノートにラオス語を書いてみたり、ジェスチャーで伝えようしたり、単なる情報収集だけではなく、分かりやすい伝え方や言い方、発音を見直す機会になり、ラオス

語の運用能力を向上させるうえでも勉強になりました。村だけではなく、郡役場や政策を管轄している情報文化観光省にも行ってインタビューを行うことができたことで、明らかになったこともあれば反対にさらなる疑問も生まれました。どちらも、ラオスにいたからこそその成果だと思います。

留学生活で一番の楽しみはラオス料理を毎日食べることでした。メコン川沿いで大学の友達とお互いの国の話や最近あったことといったとりとめない話をしながらシンダート(ラオス風焼肉)をお腹いっぱい食べたり、友達の家で持ち寄りパーティーを開いたり、「食事は大勢で楽しく」が当た

り前のラオスでは大勢でご飯を食べる機会が多くあり、その度に多くの人と知り合うことができました。友達とご飯を食べる約束がない日は家の近所のラオス料理屋さんによく行きました。何度も足を運ぶうちにお店の人が私のことを覚えてくれて、「今日は何を食べるの?」と声をかけてくれるようになりました。また、旅行などでしばらく行っていなかった後で久しぶりに行くと、「最近来なかったけど何していたの?」と話しかけてくれました。そこから始まるお店の人とのおしゃべりが楽しみでした。お店の人に限らず、いつも家のそばにいるトゥクトゥクの運転手など段々とご近所さんに顔を覚えてもらい、道で会っ



村がどのような称号を持っているのかを示す看板(首都ビエンチャン)



このような村にある役場に行ってインタビューを行いました(首都ビエンチャン)



多いときは週4日通ったカオピアック(うどんに似た麺料理)のお店(首都ビエンチャン)

たら挨拶をして少し言葉をかわすようになりました。

また、時間がある時にはできるだけ国内旅行に出かけました。これは、首都だけではわからない様々なラオスの風景を実際に見てみたいと思ったからです。北部から南部まで様々な県に行きました。特に印象に残っているのはラオス北部のポンサリー県と、南部のセコン県です。ポンサリー県は、他の地域と比べて気温が低く、朝は町全体に霞がかっている日もありました。街並みも料理もこれまでラオス料理だとイメージしていたものとは全く異なるものばかりで、ラオスの新たな一面を見たような気がしました。

南部のセコン県へは、ピーマイラオ(ラオス正月)の休みに大学の日本語学科の友達の帰省で一緒に連れて行ってもらいました。セコン県の人は普段聞きなれているラオス語と比べて速く話す人が多く、また、方言もあったため、会話に参加することが難しかったです。しかし、友達の家族にお寺に連れて行ってもらって一緒に新年のお祈りをしたり、普段の外食では食べる機会のないラオスの家庭料理を食べたりと、ラオスの普通のくらしが経験できる貴重な体験になりました。



ポンサリーの町の様子(ポンサリー県)



ケーソノマイ(タケノコスープ)を作ってくれました。
作り方を聞きながら
少しだけお手伝いもしました。(セコン県)



どちらもカオソーイという麺料理。右がポンサリー県のもので、
左は他の地域でよくみられるピリ辛の肉味噌を使ったもの(ルアンナムター県)です。同じ名前なのに全く違う味です。

この留学を通じて、知らなかったラオスの伝統はもちろん、これまで授業や教科書で知識として学んでいたラオスの伝統行事や生活を実際に肌で感じたことで、学びをさらに深められました。これは、行事のたびに誘ってくれた友達のおかげだと思います。これから先、今回の留学で仲良くなった友達が日本に来た時には、私が助けてもらったように、日本のお祭りや大学行事などで力になりたいと思います。